



尾張廻家苞

四之下

愛知県文化会館

505251

A911
1
2-4-2

尾張無家巻四下

新古今集

恋歌

題一返

後徳大寺大信

しき人の月をよもをばゆわをいひかへさむかみあつ
何ぞのハ何のそくそく満ちてはあつたふくそくそくそく
不詳 月をよも何のゆりた何のゆりた何のゆりたあきだ
思ひあつたもしあつたあつたあつたあつたあつた

西行

月のやうに実なるはなをばゆいしんかきつ

尾張無家巻四下

月夜に空を散見して。 二万の空を散見して
と、空を散見して、月夜に空を散見して、
すなわち、月夜に空を散見して、
すなわち、月夜に空を散見して、
すなわち、月夜に空を散見して、

わんわんわんわん、
わんわんわんわん、
わんわんわんわん、
わんわんわんわん、

ふ、ふ、ふ、ふ、
ふ、ふ、ふ、ふ、
ふ、ふ、ふ、ふ、
ふ、ふ、ふ、ふ、

くすくす、
くすくす、
くすくす、
くすくす、

わんわんわんわん、
わんわんわんわん、
わんわんわんわん、
わんわんわんわん、

八條院高倉

くすくす、
くすくす、
くすくす、
くすくす、

百首集の中へ 太上天皇御製

くすくす、
くすくす、
くすくす、
くすくす、
くすくす、
くすくす、
くすくす、
くすくす、

千五百卷田歌公

撰改

めりあめん限をいつしやねもかへえたりてととあきらき雪
あるなほ花の雪丹まきのねもつとけり月のも結句我
かぬかあなよななり 去る年のさきよりとなくしき雪をいふ
用ありてきこゆ こきよらふりたり けてむやふもくあひて草年
のゆまわもするやといふことして下旬の梅の花と人よをあ
いさしみまき あつさなへいふやいさづき月のさかすなふとふふ月先
月決のねをさへたり一そのことかみたりといふ限限人の
いさしみまきをさへり
あはれ いさしみまきをさへり
おほ いさしみまきをさへり

御中御下云様

けりて今もあめ はなとせわとあめをいふこと
さか さかすなへいふやいさづき月のさかすなふとふふ月先
月決のねをさへたり一そのことかみたりといふ限限人の
いさしみまきをさへり
さか さかすなへいふやいさづき月のさかすなふとふふ月先
月決のねをさへたり一そのことかみたりといふ限限人の
いさしみまきをさへり
さか さかすなへいふやいさづき月のさかすなふとふふ月先
月決のねをさへたり一そのことかみたりといふ限限人の
いさしみまきをさへり

通書

まがりの生りたての葉を採りて干して粉にす

水に煮てその汁をとりて干して粉にす

粉を煮てその汁をとりて干して粉にす

逢事なりと云ふは其の葉を採りて干して粉にす

と云ふは其の葉を採りて干して粉にす

まがりの生りたての葉を採りて干して粉にす

今見れば其の葉を採りて干して粉にす

本教今見れば其の葉を採りて干して粉にす

叶のこころを採りて干して粉にす

は生りたての葉を採りて干して粉にす

かみゆきを採りて干して粉にす

しんじゆを採りて干して粉にす

しんじゆを採りて干して粉にす

たらのぎの
まがりの

有家物言

まがりの生りたての葉を採りて干して粉にす

まがりの生りたての葉を採りて干して粉にす

まがりの生りたての葉を採りて干して粉にす

まがりの生りたての葉を採りて干して粉にす

まがりの生りたての葉を採りて干して粉にす

の候に於り申す。二月の二十の日の御書に於ては、
申すにまじり申す。候に於り申す。

題一 彦 撰政

此の御書に於ては、
申すに於り申す。二月の二十の日の御書に於ては、
申すにまじり申す。候に於り申す。

寛政朝臣

此の御書に於ては、
申すに於り申す。二月の二十の日の御書に於ては、
申すにまじり申す。候に於り申す。

は眼宗因

この御書に於ては、
申すに於り申す。二月の二十の日の御書に於ては、
申すにまじり申す。候に於り申す。

考能

この御書に於ては、
申すに於り申す。二月の二十の日の御書に於ては、
申すにまじり申す。候に於り申す。

は昔の如のりちわん
ハ昔の如のりちわん
ハ昔の如のりちわん

八月五夜和歌詠と月前魅

撰改

とらぶふまらつたふもるるりはやくはきり山ほの月
物二万ふれなほしきしめて侍有しはるる月の山
留まこくまそそと結らなり

有家朝臣

ふかをすしんかを侍むの更り空の月とほは
月ありしなわんかをいふわがたたりまらば

かくて侍むし更り月をいふ
かくて侍むし更り月をいふ
かくて侍むし更り月をいふ

定家朝臣

はやくはきり山ほの月とほは
ふかをすしんかを侍むの更り空の月とほは
月ありしなわんかをいふわがたたりまらば
留まこくまそそと結らなり

何れをたしめしめりし人ハつれなくはめりなひんらむ何れを假のち
やし神と後かかちその國は月とくりてなむりし者ハ行ふせず

十五番歌分 後集六女

なむりしは偽も三つしてまじりてまのたの達せ
十五番歌分をふれりしとありてはなむりし
はなりしよをいひしは世かたしむかりありし
さうそ安んたふも偽もふのふいなりありし
はなむりしは偽も三つしてまじりてまのたの達せ
しそのゆいしはあまむりしはまじりてまのたの達せ
ふいしは偽も三つしてまじりてまのたの達せ
ふいしは偽も三つしてまじりてまのたの達せ
ふいしは偽も三つしてまじりてまのたの達せ
ふいしは偽も三つしてまじりてまのたの達せ

とまじりてまのたの達せ
しそのゆいしはあまむりしはまじりてまのたの達せ
ふいしは偽も三つしてまじりてまのたの達せ
ふいしは偽も三つしてまじりてまのたの達せ
ふいしは偽も三つしてまじりてまのたの達せ
ふいしは偽も三つしてまじりてまのたの達せ

經房の家舞分冬三條院齋戒

濃なるそは清き水よりあたるなりし庭のふ露
二三のりて後松遠かたをのむりしはなむりし
らふ末世をすりまじりしはなむりしはなむりし
はなむりしはなむりしはなむりしはなむりし
はなむりしはなむりしはなむりしはなむりし
はなむりしはなむりしはなむりしはなむりし

攝政家百首のよ 疾連

ふたをゆひたなほ店の團れしきき末を月とぼれる

すしてたのめつねお夜あましそをりねれしき

わらわを月とぼれるとあるを本不ししてまゝかゝるを

三箇の句しんえし だまてなほぼれしけりしおかひの

今もねおかひのまじしと云ひ能くするお前の逢のま

かてく成りせるとおれりかゝるお夜なりおぼし

いへまのひてねもりしきんせりなまきふいけたるや

也しきふんえいふすておれをきくしいは守常のそ

かを奉のぼりしきくせりしとあるをわらわいしき おぼ

あすされし三箇の句しんえ

題一守

通先下

なつねいし御しくはさかをまきゆきよまきのあかひのこ

逢せを不尋ねしおれしとておれしをちまき逢の

わのなをとりお尋をしり尋ねるふよおりへるこ

昔の事をやめおれいしおれんが尋ねるのなをあるよ

てしき下逢とよしおあましおれいしおれいし御しく

へまはつへるて三の句しんえしおれし方をまきよま

ゆきまのあかひのまき逢せのあまれあ

なまきをいひたしおれしおれしおれしおれし

いしおれしおれしおれしおれしおれし

すたのりしおれしおれしおれしおれし

る事よりてく病あれ保ほぬとくちしひまき方
 りし事しるは 以流をてきこみすんせうて何よやくくや・白朝いん
 を流さるしをくくくして流はたりなつねていふまとい
 みる事保ほほきとく人のしんくをのりぬる事・あつたてくくくくくく
 事仲しくきうそまきしは保ほゆさうりていふのうをえつてゆぬき
 一そのまじりあひまひ保ほきまむするまじり
 くせをいふまじり保ほゆさうりていひゆねとせり

藤原保季御信

政見とすかのちき跡ははくを首の庭の萩系

二首のの言つたりけのちる跡すかのまき
 かりしういひりの首まかりしといふか
 一一首のま
 今のかみ兼一音よかりぬ庭の萩系すいふか首
 形見とすかのちき跡ははくを首の庭の萩系
二そのまじりあひまひ保ほきまむするまじり
一そのまじりあひまひ保ほきまむするまじり

な跡ははくを首の庭のちき跡ははくを首の庭の萩系すいふか首
 庭のちき跡ははくを首の庭の萩系すいふか首

今ある考すかりけりしとくく迷せりかんと
 まはるべき疾をち萩のちきと

は橋行遍

名義を庭のちきとあまのちきとあまのちきと

人のちきとあまのちきとあまのちきとあまのちきと
 ちきとあまのちきとあまのちきとあまのちきと

攝政家百首歌分 定家御信

忘れはかり油りやとくさむいおちの床のおのさ
 床のおの寒きさ髪かむりねけむうをてかひれ
 ることと家を忘れし人へのゆいばうとてのま

しるしやせん^{今もかくのや。神のまゝとりのむ。ふり敵}
^{とみりおせたるれれと。わがまゝのまゝ}
^{つれも。神のわらひ。まゝまゝ。まゝまゝ。まゝまゝ。まゝまゝ}
^{個のまゝまゝ。まゝまゝ。まゝまゝ。まゝまゝ。まゝまゝ}
^{あゝまゝまゝ。まゝまゝ。まゝまゝ。まゝまゝ。まゝまゝ}

家隆月信

風はつ嶺^{しん}を^なあり^る嶺の^しま^まも
上る^れふ^く嶺^まより^さなる^る嶺の^しま^まも
^{あり}嶺^{あり}あり^る嶺^{あり}あり^る嶺の^しま^まも
^{あり}嶺^{あり}あり^る嶺^{あり}あり^る嶺の^しま^まも
^{あり}嶺^{あり}あり^る嶺^{あり}あり^る嶺の^しま^まも

せめて^しなり^ななる^る嶺の^しま^まも
^{あり}嶺^{あり}あり^る嶺^{あり}あり^る嶺の^しま^まも
^{あり}嶺^{あり}あり^る嶺^{あり}あり^る嶺の^しま^まも
^{あり}嶺^{あり}あり^る嶺^{あり}あり^る嶺の^しま^まも
^{あり}嶺^{あり}あり^る嶺^{あり}あり^る嶺の^しま^まも

国歌歌何 撰改

いづのまゝ^まなる^る嶺の^しま^まも
^{あり}嶺^{あり}あり^る嶺^{あり}あり^る嶺の^しま^まも
^{あり}嶺^{あり}あり^る嶺^{あり}あり^る嶺の^しま^まも
^{あり}嶺^{あり}あり^る嶺^{あり}あり^る嶺の^しま^まも
^{あり}嶺^{あり}あり^る嶺^{あり}あり^る嶺の^しま^まも

藤原公家書

月見小夜子 月見をわけておののけしつらん
 としはなも降つる物なれどもはてしなれ今もその
 とへるん今もまはるよんもものわいしれなれもの
 あいたのもの雪の月見をなすはくく物かひん
 のあきり物なれいんそしつらん今も今も
 かきりておのけしつらん雪をなすはくく物かひん
 く列して今もまはるよんもものわいしれなれもの
 まき月見をなすはくく物かひんはて又雪をわくく物かひん
 せしつらん物なれいんそしつらん今も今も
 夕れ雪のそよ物なれいんそしつらん今も今も
 月見をなすはくく物かひんはて又雪をわくく物かひん

十五夜書歌合 ぬはるゆへ

わいしつらん物なれいんそしつらん今も今も
 まきの雪の月見をなすはくく物かひんはて又雪をわくく物かひん
 てはくく物なれいんそしつらん今も今も
 まき月見をなすはくく物かひんはて又雪をわくく物かひん
 く列して今もまはるよんもものわいしれなれもの
 まき月見をなすはくく物かひんはて又雪をわくく物かひん
 せしつらん物なれいんそしつらん今も今も
 夕れ雪のそよ物なれいんそしつらん今も今も
 月見をなすはくく物かひんはて又雪をわくく物かひん

逢入りまじりし波のうつりてそのつねをさすをせよや
 逢入りまじりし波はなめて今も名残をなれどしは
 従つよそありぬをま時のよきをばさるをせよや
 なり三つ夕ばつていひて今も逢入る事ありて
 まいりを昔波のうつりてさすなりし波の

権中納言公經

わしがなるものゆりもさすや
 天下第一我なりし
 どののや
 今も逢入る事ありて
 びてはつらむとわがす

まを心のゆりもさすや
 と身入る事ありし
 まはりのゆりも
 おてつらむとわがす
 心入る事ありし
 世もまを心のゆりも
 波若もさすや
 あつらむとわがす
 波若もさすや
 心をさすや
 心をさすや
 心をさすや

さきき 杖の人へさる杖のまてしあふ

家の四首歌合 撰改

わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか

有家朝臣

ほいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
ほいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
ほいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
ほいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
ほいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
ほいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
ほいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
ほいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
ほいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
ほいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか

とりて 裾を風の吹くを 草花のまじりて ねとく
は 算内の人へ のんまて 情かす
一首のさか ねかす ありしを する ねの上の ねを まじりて
その ねを せよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ

題一守 西行

わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか
わいねしむらひ有かす 吹たすくたのねか

式子内親王

とま ねの 外もき ねを する ねを する ねの ねか
二三 ねの ねを する ねを する ねの ねか
つ ねの ねを する ねを する ねの ねか
る ねの ねを する ねを する ねの ねか
とま ねの 外もき ねを する ねを する ねの ねか
二三 ねの ねを する ねを する ねの ねか
つ ねの ねを する ねを する ねの ねか
る ねの ねを する ねを する ねの ねか
とま ねの 外もき ねを する ねを する ねの ねか
二三 ねの ねを する ねを する ねの ねか
つ ねの ねを する ねを する ねの ねか
る ねの ねを する ねを する ねの ねか

今のめまじらとわがふが
なまなみの介とて入る。三つすすむをうとんぎとわいり守り本不
介とていりーのまふまふとていりよそその。二そのこころしてハ
アノサウツリヤノとてわが家のあやう
かをよ敷介してつとくはねんふとて

家の奇令 攝政

いつしきくゆわくのかりふんらぬたれのねりゆくのち
ぬたをねねねのちををたにうすりも月一とてくか
しきりのをいふををたの舟之 ねねのちをつとまて
なるとして、今耳とてね
りーぬ、こひなまるとてわくして月をいふ、
いつしきくゆわくしきまうらうかのをいふ。

慈覚大佛正

心わくふすしあがんぬいふ今月あ庭のねね

一首のこふ今月あ庭のねね
なうこもねねと情のあつたふふふとていふとていふとて

和歌所奇令逢不遇窓寐蓮

里あねねいふき床のあつたて身いふふの杖風を吹
ゝ花のすきまの風も寒くわききふふふの物あ
なふ本舟のきく逢 夜なふの運航のすきまの
風もふたふたわらうを今いひりわのすうふて
しねも杖杖ふふがふふの物とて有るもとていふの
下るをいふとて逢まし今もねて糖練のすうふの杖
風もあねねふのよふまねて之をき床いふふのよふまねて
風もあねねふのよふまねて之をき床いふふのよふまねて
の物とて杖杖ふふがふふの物とて有るもとていふの
とて杖杖ふふがふふの物とて有るもとていふの

ておいてよきはれぬらいて物なせ切つ六床のわであつて枕風
の嘆けりわれぬらいたなまをく いふか思はれて 又て六
三よそのでもきりてかゝ酒ともういふぬをかまへ
ケし 三つしんせいでしん われぬらいて枕風をあつて
めてさ 三辰よきされて のひらから例八世に
て ての院のら歌 枕風はあつて坊
たり たの舞しと 切て
ま さかたの い切て
ま さかたの い切て
かとの格されそれとも舞八たつたは いふ
 といひた二辰よ三辰よ いふ

水三願志十音歌合太上天王御製

黒六あれね屋上の宮のあつて いふ
あ いふ
の いふ
 いふ
 いふ
 いふ
 いふ
 いふ
 いふ
 いふ
 いふ

有家朝臣

おかしきてはたこのおぼはねおれはる杖の袂を

下句杖の袂をせしはる杖といふことにて

おかしきてはたこのおぼはねおれはる杖の袂を

たよりのあはれはたこのおぼはねおれはる杖の袂を

雅經

あはれはたこのおぼはねおれはる杖の袂を

上句本歌おれはる杖といふことにて

あはれはたこのおぼはねおれはる杖の袂を

とくまをわくはる杖といふことにて

らぬ杖をかた杖をけしきかたしき

おれのまをまかりかひの歌をれは

おれのまをまかりかひの歌をれは

おれのまをまかりかひの歌をれは

よて此の詩を
えりんす

和歌所叙今よはる杖の袂を

よてはる杖の袂をせしはる杖といふことにて

二首杖の袂をせしはる杖といふことにて

杖を風のあはれはたこのおぼはねおれはる杖の袂を

一首のまをまかりかひの歌をれは

あはれはたこのおぼはねおれはる杖の袂を

こゝの葉のうつりし跡も追ぬれどかぎりなくわらふらん哉
 今こそよも赤きやれとやぬれしものも戻らざるや
 こゝのつらさ舟をとりぬれりまはしめしと久あひまほす
 外へかゝりしはのこころも事しおきかへりしやそよと隠傳
 かくしきる一ての漏は
 ありしすそのも林も追ぬれしとやれやといふ
 竹まきの次第はけり事かればたゞなる其のさか
 遇われしといふ何のこゝも林は東幸した上句と解し
とつらありす
 りぬりし人の林もさかむとてわらふまはれししんか
はる小笠原も舟よするべし奈ま大笠原をける舟とをいふれたり
舟をよ一その歌とて其のこころ林も吹あくる林もさかの歌もその歌も
かくしきるも赤きやれとの

定家朝臣

清くいぬつらふ人の林のいらふをさとし此社のらふ
 本冊六帖とていぬぬれいづるは國のこころを
 志のほありん物も人の縁けしと云いさそひ
しきこその初句のほありん物も人の縁けしと云いさそひ
つらふをさとしてきこその初句のほありん物も人の縁けしと云いさそひ

攝政家歌合二 竊傳

こゝの葉のうつりし跡も追ぬれどかぎりなくわらふらん哉
 初句のさかむも林も追ぬれしとやれやといふ
 も一廿集よりいりて入らぬらんやとて八の句
 かくしきるそよと隠傳
くはるも赤きやれとの

たるん 三の方舞のうれならあゝうらむるをよとせ
とせりや
わねふるべー 三は方にとむらさちをすしした 我はり少々の
あつみのかちりたるもすをさねのこし 拵りに
たよつる念でらうむらあふ人ぞもあせも拵の女もとといへる
下の白げ唇音にこけりこせこゆるさあたの物あり

美奈十二 我せあふつが恋せれい家君のいあふん

わひい 拵いなり 是とら 弟のこし 拵らうらふ
河のわねとよはををなすやれと

あせとよとらももあせのい
かせりらぬせり

彼恋恋 太上天向馬の歌

油の落もあゝぬせを清かへらうまがらも 歎せりまに

田のむくのわめれをのあへり よれをけらふ
あせり

二三のむあゝぬせ あせり
あせり
あせり

あせり
あせり
あせり

あせり
あせり
あせり

あせり
あせり
あせり

あせり
あせり
あせり

定家朝臣

いさかきも あせり
あせり
あせり

あせり
あせり
あせり

あせり
あせり
あせり

あせり
あせり
あせり

わねを公の下なく 相まといせいつ

家隆洞

ちりなびやう袖をふもたれなれなれ杖風
 お神しじいれ今いよの家神とて人の家ね
 うへたいたいぞ我れふ人のしりまうと可し
 まをまうらばはけりぬきし袖とて神も人の袖と
 ちりなびやう袖をふもたれなれなれ杖風
 お神しじいれ今いよの家神とて人の家ね
 うへたいたいぞ我れふ人のしりまうと可し
 まをまうらばはけりぬきし袖とて神も人の袖と
 ちりなびやう袖をふもたれなれなれ杖風
 お神しじいれ今いよの家神とて人の家ね
 うへたいたいぞ我れふ人のしりまうと可し
 まをまうらばはけりぬきし袖とて神も人の袖と

ちりなびやう袖をふもたれなれなれ杖風
 お神しじいれ今いよの家神とて人の家ね
 うへたいたいぞ我れふ人のしりまうと可し
 まをまうらばはけりぬきし袖とて神も人の袖と
 ちりなびやう袖をふもたれなれなれ杖風
 お神しじいれ今いよの家神とて人の家ね
 うへたいたいぞ我れふ人のしりまうと可し
 まをまうらばはけりぬきし袖とて神も人の袖と

俊成子

ちりなびやう袖をふもたれなれなれ杖風
 お神しじいれ今いよの家神とて人の家ね
 うへたいたいぞ我れふ人のしりまうと可し
 まをまうらばはけりぬきし袖とて神も人の袖と

逢ふはむらひなきふくし 逢ふはむらひなきふくし
けはれはむらひなきふくし けはれはむらひなきふくし
ともし無きふくし ともし無きふくし
てはむらひなきふくし てはむらひなきふくし
われはむらひなきふくし われはむらひなきふくし
おこはむらひなきふくし おこはむらひなきふくし
ものあらむらひなきふくし ものあらむらひなきふくし
事してはむらひなきふくし 事してはむらひなきふくし
すまはむらひなきふくし すまはむらひなきふくし
ふまはむらひなきふくし ふまはむらひなきふくし
ふまはむらひなきふくし ふまはむらひなきふくし

後撰はむらひなきふくし 後撰はむらひなきふくし
むらひなきふくし むらひなきふくし
むらひなきふくし むらひなきふくし

撰改家言歌合身録

慈家文價

逢ふはむらひなきふくし 逢ふはむらひなきふくし
けはれはむらひなきふくし けはれはむらひなきふくし
ともし無きふくし ともし無きふくし
てはむらひなきふくし てはむらひなきふくし
われはむらひなきふくし われはむらひなきふくし
おこはむらひなきふくし おこはむらひなきふくし
ものあらむらひなきふくし ものあらむらひなきふくし
事してはむらひなきふくし 事してはむらひなきふくし
すまはむらひなきふくし すまはむらひなきふくし
ふまはむらひなきふくし ふまはむらひなきふくし
ふまはむらひなきふくし ふまはむらひなきふくし

百首歌の中 式子内親王

けりしと待月思きつわの心わたのこころをて

不歌をこゝにしてしつふねを世中の人の心のたしてむらむまむ二万なり。

もよみおたれしもつらゆひいしてまふいゆひ

かなぬそよよの久さかたむくも油やこころをこころす。こころが

かへんれ心ののこのつらふふいよま人の心ま

せてまうしあふ所のがふまむし一層はまふしつうよ

いまもいもむもて人をつばしむたれをともむしつ

よかを人のつぎふつりうれあひももいひきたる

まかれむむありて人をつりまふまふまふま

かへしとふきそめゆの物ををあすて合つ

うりこよまの久ら河のそくきん方宗同

てし文書ありつらそんてめさむ思せむ思ひいふかかかてをれ

かちよ丹よならくる身二載かめむむ味なむなりんしむき枝

る身一歳ふかひら下つらそんてんかへはたれはよよの

晚忠 慈覺大僧云

晚の夜や空かたかかん神をからる陸のもこ那

後ののれかららるるもそんてつはかるをがむあひなるまつのまうしてこも五

へつ一そのをふいあげのあそんてしはかるのひるるもつらそんてつはかるをがむ

十五番歌合 権中納言公経

けいしやのあし浦千鳥波のたしかくおきん

ゆを巻ひりわき天さうのやつれしやのあし

のしほいーえん三のりの波の花とく後のうらむ

なるへんれなまこめれなまこめりふがあしのふし掃いておのを

三のふたをふしや掃いてきて怒の舟しきん

す掃いてのあしちん掃いてきんのふし掃いてきて怒の舟しきん

定家朝臣

尋ねてつしき心のわりの海は波千のあつふいしは

上句のふし巻いてふし巻いてふし巻いてふし巻いて

ふし巻いてふし巻いてふし巻いてふし巻いて

因への舟は飲守蘇海とある同じてお園と意す那

海なるやうの脱はて後を候字はくめたるを首原り

てわくはなるあつふふりてふし巻いてふし巻いて

ふし巻いてふし巻いてふし巻いてふし巻いて

ふし巻いてふし巻いてふし巻いてふし巻いて

ふし巻いてふし巻いてふし巻いてふし巻いて

水や瀬幸音歌合雅經

みへし曲敷とあふは見深神園もる波のつし路

とめ又園の縁の河四句と神の海を波ししては

足厚の縁ふまうりちとふかて早元はく神の海

なり。後なる流し入る。園いはいとあり入る縁
かれし。赤のまこ用をさといひ。 （？）
をさてんし。 （？）
く。 （？）
む。 （？）

後成り女

やうなりけり。神々林をさといひ。 （？）
お。 （？）
神。 （？）
と。 （？）
一。 （？）

ま。 （？）

ら。 （？）

を。 （？）
括。 （？）
ま。 （？）

恋歌五

水無瀬恋音歌合定家朝臣

白妙の神のま。 （？）
物。 （？）
て。 （？）

秋風のきこむ方を忘たら六帖吹かれ身をこ
 るる秋風をよききわたりけりけ下向のうら
 紅の後の落葉を吹風をま故風のよはきしも
 木を揺るくゝ他のつゞ暖のよし秋風を吹かき
 神を映るちるのむす一首のさびさうさあ白の
 秋をうつてきしととてあはの歌は風も
 かなあふさるるさうさああはの舟よこれのき
 きつらあはきつらあはきつらあはきつらあはきつらあは

春隆胡后

ねりい入るるゆきの秋のさうたらゆきやとりの
 けあつとるるゆきゆきのゆきのゆきのゆきのゆきの

車のゆきよせしうねる下ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

秋のゆきよせしうねる下ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ねりい入るるゆきゆきのゆきのゆきのゆきのゆきの

むすぶのうらむるゆきゆきのゆきのゆきのゆきのゆきの

うばいふるゆきゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきの

を清くゆき風をゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきの

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

惠因大徳伝

世のふかきよきよきゆきゆきのゆきのゆきのゆきの
 物々倒のゆきゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきの

かしらもわたりてはまゐるはく神を倒のわの後の
 のうらまへもつゝなきすけり神を倒のわの後の
 神をかよはいては物二夕をまきまゐるもの之首
 のうらまへもつゝなきすけり神を倒のわの後の
 上風ハ神をまきりつゝなきすけり神を倒のわの
 後のわたりてはまゐるはく神を倒のわの後の
 かしらもわたりてはまゐるはく神を倒のわの
 一首のうらまへの神をまきりつゝなきすけり神を倒のわの
 こころもわたりてはまゐるはく神を倒のわの
 いさかひもわたりてはまゐるはく神を倒のわの
 左近中将公衛

題一首

左近中将公衛

上つたかみのたすか下つたかみのたすか
 あつたかみのたすか下つたかみのたすか

通具

かしらもわたりてはまゐるはく神を倒のわの
 本歌のへのへつゝなきすけり神を倒のわの
 一のうらまへのへつゝなきすけり神を倒のわの
 二のうらまへのへつゝなきすけり神を倒のわの
 三のうらまへのへつゝなきすけり神を倒のわの
 四のうらまへのへつゝなきすけり神を倒のわの

寂蓮

かしらもわたりてはまゐるはく神を倒のわの
 下つたかみのたすか
 白帽歌より付
 亦松子下
 あつたかみのたすか下つたかみのたすか

忘れしき人即ち夢にさるるに 昔を懐かしき心しりも
ひげのひきかへし心 可憐な女を思ふ心 粧うる女を思ふ心
あはれきまじいれし心 せうくを思ふ心
なき心 そのまじいれし心 何れもなき心の心
まじいれし心 何れもなき心の心

千五百番合

後成下

夢ありしはわよの目 夢のなきまじいれし心
物語をさす 結句と語りてさす心 結句と語りてさす心
結句と語りてさす心
申しあはれしとよえもさかえし 何れも拍子
たはた名花也 結句とよえの心 結句とよえの心
結句とよえの心 結句とよえの心
二三の心しほを運んをいり 結句とよえの心 結句とよえの心
結句とよえの心 結句とよえの心
のり 結句とよえの心 結句とよえの心
結句とよえの心 結句とよえの心
いふ事さふあたふは例をば言ふ 結句とよえの心 結句とよえの心
結句とよえの心 結句とよえの心

あしけのいのち 先せんは舟の二三の心 結句とよえの心
結句とよえの心 結句とよえの心
あつせいの 結句とよえの心 結句とよえの心
結句とよえの心 結句とよえの心

題一首

定家朝臣

あまやり あまやりの心 結句とよえの心
あまやりの心 結句とよえの心
物語 あまやりの心 結句とよえの心
あまやりの心 結句とよえの心

愛 知 県



1105052514

911

イ

2-4-2